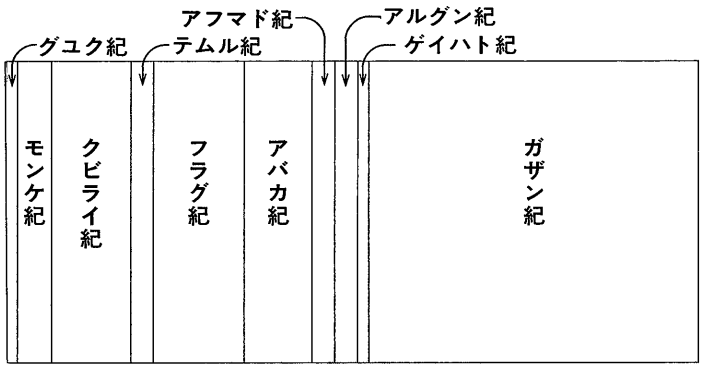
ラシード・ウッディーンの『モンゴル史』
――『集史』との関係について――

志茂　智子

はじめに

イル汗国第七代の君主となったガザン汗（在位一二九五～一三〇四年）がまずなすべきことは、長らく続いてきた政治的混乱を収拾し、フラグ一門と麾下のモンゴル諸部族との結束を強化してゆるぎない政権を確立することであった。一二九九年、対立勢力を一掃したガザン汗は直ちに外部の敵マムルーク朝に対しシリア遠征を繰り返し敢行して、内部の結束を固めると共に、シリア作戦中のヒジュラ暦七〇二年（一三〇一／二年）、宰相ラシード・ウッディーン（一二四七～一三一八年）にモンゴルの歴史の編纂を厳命した。チンギス汗一門に代々仕えてきたモンゴル諸部将の系統・系譜・功業・地位・職掌等を詳述させ、チンギス汗一門と麾下の諸部族との強い結び

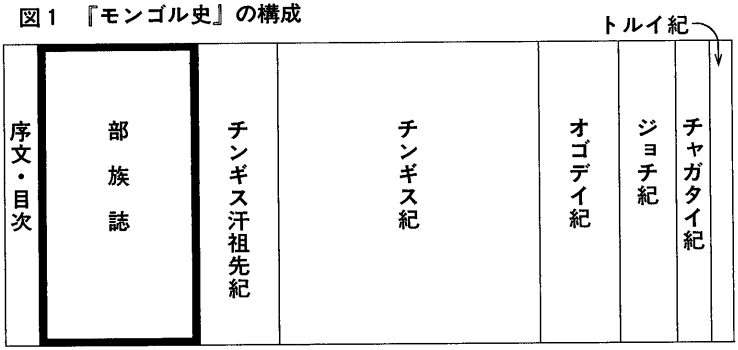


つきを改めて想起させようとはかったのである。チンギス汗歿後七〇余年を経過したガザン汗の時代、遊牧部族連合国家イル汗国の将来を荷うべきイラン生れのモンゴル諸部族の新世代は、もはや先祖代々続いてきたチンギス汗一門との密接な繋がりを強く意識してはいなかった。内部の結束を固め、政権強化と国力増強をはかるガザン汗にとって、モンゴル諸部族の系統・系譜を明らかにして諸部将とチンギス汗一門との関係を詳述したモンゴルの歴史を編纂することは、政治的に不可欠の重要課題であった。(1)

ラシードは、ガザン汗の厳命に従ってイル汗国宮廷古文書庫収蔵のモンゴル語原典史料を主要な典拠として『モンゴル史』を執筆し、ガザン汗歿後の一三〇七年に脱稿、ガザン汗を継いだ弟のオルジェイト汗に献呈した。さらにラシードは、オルジェイト汗の命を承けて『万国史』を著し、一三一一年、『モンゴル史』と合わせて『集史』を完成させた。

ラシードの『モンゴル史』は、現在、全巻、あるいはその一部が様々の写本の形で残されているが、その記事の内容、筆写の体裁は多様であり、どの写本がラシードの著作を正確に伝えているのか、容易には理解し難く、諸写本を校合して『モンゴル史』の正確な姿を提示し得た者は誰もい

図1　『モンゴル史』の構成



なかった。『モンゴル史』全体にわたる考察は追って発表する予定でいるが、本稿においては『モンゴル史』「部族誌」に焦点を絞り、諸写本の「部族誌」の比較検討を通して『モンゴル史』本来の姿を明らかにしていきたい。なぜなら、「部族誌」はガザン汗の厳命に応えてラシードが著した『モンゴル史』の核心部分であり、「部族誌」を取り上げることにより『モンゴル史』全体の姿を浮かび上がらせることができると確信するからである（図1）。

本稿で参照する写本は以下の如くである。

1　イスタンブル・トプカプ宮殿附属図書館写本　Revan Köşkü 1518（略号I）　一三一七年筆写
2　テヘラン議会図書館写本　2294　（略号T）
3　パリ国民図書館写本　Supplément Persan　1113　（略号P）
4　レニングラード、サルティコフ・シチェドリン図書館写本（略号L）　一四〇七年筆写
5　大英図書館写本　Add. 7628（略号B_1）一四三〇年頃筆写
6　イスタンブル、スレイマニイェ図書館写本（ハーフィズィ・アブルー全

書版）Damad Ibrahim Paşa 919（略号H）

7　大英図書館写本　Or. 2927（略号B_2）一五八六年筆写

8　大英図書館写本　Or. 2885（略号B_3）一六二一年筆写

9　インド省図書館写本　3524（略号IN）一六七一年筆写

10　大英図書館写本　Add. 16688（略号B_4）一四世紀筆写

I写本はラシード存命中の一三一七年にバグダードで筆写された古写本として有名で、『モンゴル史』の全巻からなる。

T写本は『モンゴル史』巻頭から「チンギス紀」中のチンギス汗の中央アジア遠征の記事の途中までが残されている。現在利用し得る写本中、固有名詞・術語の誤りが最も少ない。このような点から見ても、また書体から見ても、T写本は一四世紀、イル汗国時代の写本と考えられ、筆写年代はI写本と前後していると思われる。

P写本は『モンゴル史』全体を扱ったものであるが、かなりの欠葉、錯簡が見られる。但し、「部族誌」に関しては欠葉は比較的少ない。書体から見て一四世紀の写本と思われるが、詳細は他写本との校合によらねばならない。

L写本はティムール朝初期の一四〇七年に筆写された『集史』全巻の写本である。一四三〇年頃に筆写されたと見られるB_1写本はL写本と各葉の配字・体裁が同じであり、両写本は全く同系統のものである。また、後代に

筆写されたH写本もL写本の系統の写本である。従って、L・B_1・Hの三写本は同系統の写本ということになる。これら三写本のうち、L写本は最も筆写年代が古いのみならず、明瞭な書体で筆写された群を抜いて完成度が高い写本であり、ティムール朝初期を代表する古写本といえる。

本稿の課題を扱うにあたっては「部族誌」を含む整った古写本が不可欠であるが、このような写本はI・T・Pの三写本及び、L写本に限られる。そこでI・T・P・Lの四写本を利用して「部族誌」の記事の異同を逐一検証し、しかる後、新しい時代の写本であるB_2・B_3・IN写本を参照することにしたい。尚、B_2・B_3両写本は『モンゴル史』全巻の写本であり、IN写本は『集史』全巻の写本である。

一　イスタンブル(I)写本とテヘラン(T)写本

1　イスタンブル（I）写本とテヘラン（T）写本間に見られる相違点

論を進めていくにあたっては筆写年代が古く、しかも一三一七年とはっきりしているI写本を基準に据えていくこととする。今、仮にI写本を基準として、T、P、L写本との間に何らかの異なる点があるとすれば、次の七通りが考えられる[2]（表1）。

I写本を基準として、T、P、L写本に起こり得る異同には次の三様が考えられる。

①I写本の当該部分に何らかの部分が増補されている場合

表1

I写本	T写本	P写本	L写本	
I	Ⓐ	Ⓐ	Ⓐ	I写本を基準にしてT写本に違い（Ⓐ）があり、それがP・L両写本に継承されている場合
I	Ⓐ	Ⓐ	I	I写本を基準にしてT写本に違い（Ⓐ）があり、それがP写本に継承されている場合
I	Ⓐ	I	Ⓐ	I写本を基準にしてT写本に違い（Ⓐ）があり、それがL写本に継承されている場合
I	Ⓐ	I	I	I写本を基準にしてT写本のみに違い（Ⓐ）がある場合
I	I	Ⓑ	Ⓑ	I写本を基準にしてP写本に違い（Ⓑ）があり、それがL写本に継承されている場合
I	I	Ⓑ	I	I写本を基準にしてP写本のみに違い（Ⓑ）がある場合
I	I	I	Ⓒ	I写本を基準にしてL写本のみに違い（Ⓒ）がある場合

②I写本の当該部分が言い換えられている場合

③I写本の当該部分から何らかの部分が削除されている場合

①②③各々をさきの七つの場合と組み合わせると二一通りになる。

筆者が検証した文章・語句等の様々な相違点、二一通りの用例数を表にすると下記の如くなる（表2）。

この表から明らかなように、I写本とT写本との間には異なる点が非常に多い。特に、増補は著しい。言い換え、削除に関してもそれぞれ相当数の違いが見られる。I写本とT写本の相違点三七六例中、**三〇六例はP・L写本に継承**されている。そしてこれら三七六例の相違点の中でとりわけ注目すべき違いは、T写本では、

表 2　各写本間の記事の異同の用例数

Ⅰ写本	T写本	P写本	L写本	①；増補 ②；言い換え ③；削除		
Ⅰ	Ⓐ	Ⓐ	Ⓐ	① 150 ② 96 ③ 60	306	376
Ⅰ	Ⓐ	Ⓐ	Ⅰ	① 0 ② 8 ③ 5	13	
Ⅰ	Ⓐ	Ⅰ	Ⓐ	① 0 ② 3 ③ 2	5	
Ⅰ	Ⓐ	Ⅰ	Ⅰ	① 14 ② 20 ③ 18	52	
Ⅰ	Ⅰ	Ⓑ	Ⓑ	① 13 ② 29 ③ 23	65	319
Ⅰ	Ⅰ	Ⓑ	Ⅰ	① 80 ② 82 ③ 92	254	
Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⓒ	① 1 ② 5 ③ 6	12	12

Ⓐ　Ⅰ写本を基準にしてT写本に違いがある場合、またそれがP、L写本に継承されている場合

Ⓑ　Ⅰ写本を基準にしてP写本に違いがある場合、またそれがL写本に継承されている場合

Ⓒ　Ⅰ写本を基準にしてL写本に違いがある場合

Ⅰ写本中に見られる以下の一七例のひとまとまりの記事が削除されていることである。これらは「部族誌」全体の八～九％をも占めるものである。

①ジャライル部族の部族伝承に関する話（「ジャライル部族誌」14a／18～19）

②ソルカクタニベキが銀を搬出するためにモンゴル部将達をアラトジン地方に派遣した話（「タタール部族誌」16b／4～12）

③シギクトクの話（「タタール部族誌」18a／18～18b／7）

④ブカテムルの四姉妹の話（「オイラート部族誌」21b右／25～29）

⑤ケレイト部族の夏営地・冬営地の話（「ケレイト部族誌」23b／30～24a／11）

⑥ジルキン氏族がチンギス汗のもとに来降した話（「ケレイト部族誌」24a／17～23）

⑦オンカンの父とオンカンの兄弟の話（「ケレイト部族誌」24b／18～25a／2）

⑧オンカンのチンギス汗からの離反の話（「ケレイト部族誌」25a／29～25b／3）

⑨チンギス汗時代以前のナイマン部族の話、ナイマン部族の夏営地・冬営地の話（「ナイマン部族誌」26a／15～31）

⑩結語部分（「ウイグル部族誌」29a／18～19）

⑪オンギラート部族のユルトの話（「オンギラート部族誌」32a／22）

⑫バヤウト部族のユルトの話（「バヤウト部族誌」36b／12～20）

⑬ナチンに関する異説（「タイチウト部族誌」38a／12～17）
⑭ジェベがチンギス汗のもとに来降した話（「タイチウト部族誌」38b右／10～29）
⑮タイチウト部族の内部事情（「タイチウト部族誌」38b左／10～39a左／19）
⑯古来親縁関係にあった諸部族の話（「ノヤキン部族誌」39b／27～29）
⑰イルチダイの話（「ジュルヤート部族誌」42b／4～6）

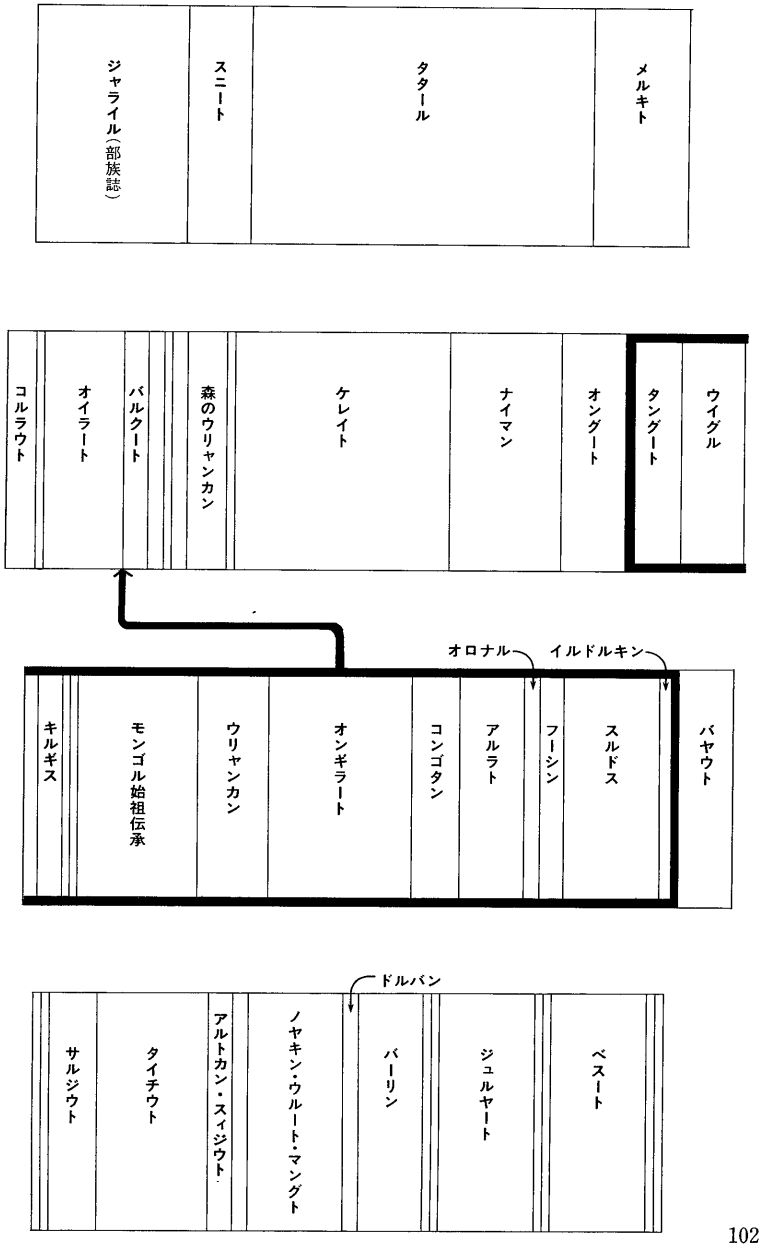
筆写年代が非常に近いと思われるI、T両写本間にこれほど大きな違いがあることは極めて注目すべき事実であり、これら大量の記事の有無の相違はI写本とT・P・L写本とを区別する決定的な違いとなっている。

また、I写本とP写本間の違いも多い。特にP写本のみ異なっている点が二五四例も見られる。但し、これらP写本のみに見られる他写本との違いはほとんどが単語単位のものである。P写本の誤記、あるいは同義の単語による言い換えである場合が多く、[3] この部分の記事の内容はI・T・L写本と変らない。結局、P写本は、T写本中の一部の単語が誤りと言い換えで異なっているが、記事の内容はT写本と事実上、ほぼ同様なのである。

L写本はI・T・Pの三写本と章立てに決定的な違いがある。通常の「オイラート部族誌」と「バルクート部族誌」との間に、「部族誌」全体の三〇%を占める「タングート部族誌」から「イルドルキン部族誌」に至る一四の「部族誌」が下記の図の如く割り込んでいる（図2）。

但し、記事の内容に関してはT・P写本と異なる部分は少なく、結局、L写本はT・P写本の記事を一部、章立てを入れ替えて記した写本ということになる。この章立ての違いは、B_1・H写本と全く同様で、L写本系統の

図2　「レニングラード(L)写本」に見られる章立ての変化



特徴といえる。

現在手にするT写本は「チンギス紀」の途中までしか残っておらず、奥書きもなく、いつ筆写されたものかを直ちに知ることはできない。しかしT写本は現存する『モンゴル史』中、その表記が際立って正確であり、重要なモンゴル人の名前、モンゴル語・トルコ語起源の遊牧政権固有の術語には発音符号が付けられ、文章上の不注意な誤りも少なく、モンゴル語に精通したスタッフが参画し得たイル汗国盛時の写本と考えられる。これに対し、P・L写本を見ると、『モンゴル史』作成のもととなった中心的なモンゴル語の歴史書『アルタン・デフテル』(『金冊』)について、正しくは「daftar-i Altān Daftar」(『アルタン・デフテル』というとじ本)とあるべき記事が、P写本では「dūr altān dūr」、L写本では「daftar-i Altān Khān」と記されている。P・L写本が作成された時期には、もはやこうした重要な原典史料の名前すら理解されずにいたことがわかる。このことから見て、P写本はT写本よりも新しい写本であり、T写本を基準とする単語の書き誤りや言い換えは後代の筆写の過程で生じたものと考えてよいだろう。章立てが異なるL写本はP写本よりさらに新しい写本と思われる。

結局、各写本の記事の内容の違いの中で、I写本とT写本との間に生じた差異のみが本質的な違いであるということが判明する。従って、このI写本とT写本間の相違点こそが究明すべき第一の問題となる。

次に、I写本とT写本の関係を明らかにするために、さきの表2に挙げた多くの語句の相違を具体的に検討してみよう。

2　イスタンブル（I）写本とテヘラン（T）写本間に見られる語句の相違の具体例

(1)　イスタンブル（I）写本に対してテヘラン（T）写本で語句が増補されている例

表2のうち、I写本とT写本の違いの中で最も多くの部分を占める、I写本に対してT写本において語句が増補されている代表例を表に示すと下記の如くなる（表3）。

増補されている部分は以下の如く分類できる。

①語句を挿入してより詳しい記述にしている例、文意を理解しやすくしている例（1～15）

②欠落した表題、あるいはその一部を補っている例（16～17）

③副詞・前置詞・後置詞・接続詞を加えてより文意を明確にしている例（18～21）

④同格となる固有名詞を加えている例（22）

⑤主語となる固有名詞を加えて動作の主体を明確にしている例（23）

⑥名詞を加えてより文意を明確にしている例（24～38）

⑦I写本の空欄を補っている例（39）

⑧人名に称号を付け加えている例（40～43）

⑨名詞を加えて術語としている例（44～45）

⑩動詞を加えてより詳しい表現にしている例（46～47）

表3　「イスタンブル（I）写本」に対して「テヘラン（T）写本」で語句が増補されている例

（下線部分が増補されている部分）
（〈　〉内は増補によりT写本で文意に関係なく変化が生じた部分）

			引用箇所 上段I写本 下段T写本
1	「チンギス紀」中の物語や他の歴史書で述べられているもの	anch az ān hikāyāt dar tārīkh-i Chīnkkīz Khān va dīgar tavārīkh gufte āyad	14a/10 14b/22
2	彼の息子はハサンそして彼の息子はホセイン	pesar-i ū Hasan va pesar-i ū Husaīn	14b/12 15a/23
3	彼はチンギス汗の母ウアルン・フジンの兄であった	ū barādar-i Ūālūn Fūjīn mādar-i Chīnkkīz Khān būde	33a/8 32b/26
4	二人の息子がいて、一人の名はイキラス、そして他の一人はオルクヌート	dū pesar būde 〈ast〉 nām-i yekī Īkīrās va az ān-i dīgarī Ūlqūnūt	33a/2 32b/17
5	トクタイ・ベキはその時非常に不安にかられて	Tūqtāī Bīkī dar hāl az ghāyat-i vahm va harās	42a/17 40b/26
6	そして彼のもとに仕えていた	va dar bandegī-yi ū mulāzimat 〈-i ū〉 namūde	21b左/28 21b左/16
7	使者―彼の名は［　　］であった―をカタキン部族のもとに〔送った〕	īlchī ke nām-i ū ［　］būd pīsh-i qaum-i Qataqīn	37b/28 37b/11
8	総勢13キュリエンのうち彼の軍隊は一つのキュリエンであった	az jumle-yi sīzda kūrān lashkar-i ū yek kūrān-i īshān būdand	36b/21 36b/1
9	このような理由で	……bedīn mūjab	23b/26 23b/7
10	困窮の時	……be vaqt-i tang dastī ……	22a/15 22a/7

11	カルルク、カラチ、キプチャク、その他もまたウイグルの名を	Qārlūq va Qalch va Qipchāq va gheil ham ism-i Ūīghūr	28b/16 28a/1
12	[イルカイ・ノヤンの]第八子トガン	pesar-i hashtum Ṭughān	14b/13 15a/24
13	彼の名はイルチギン、イルチギン部族は総て彼の一門から出ている	nām-i ū Īlchīgīn ke qaum-i Īlchīgīn jumle az ustkhwān-i ū and	33a/12 33a/2
14	彼の名はコルラス、コルラス部族は総て彼の後裔である	nām-i ū Qūrūlās ke aqvām-i Qūrūlās tamāmat az nasl-i ū and	33a/19 33a/12
15	彼から特別の罪状は見つからなかったので	az ū ziyādat gunāhī ⟨nadāshte⟩ …… nayāmade	21a/15 21a/3
16	「ウラスート，タランクート，クシュタミ部族」	Qaum-i Ūrāsūt va Talankūt va Kushtamī	22b/20 22b/14
17	第二の分枝　スィジウト部族	Sha'be-yi duvvum qaum-i Sījīūt	39b/7 38b/4
18	この部族もあの二人の後裔達である	īn qaum ham az nasl-i an dū shakhṣ and	32a/18 31b/19
19	彼らもまた同様にニルンと呼んだ	īshānrā nīz hamchunīn Nīrūn gūyand	30 a 右 / 15 29 b 右 / 14
20	そこで待っていろと言った	gufte ast ke muntaẓir īstādam	34b/25 34b/22
21	彼の馬を盗んだ	asbān-i ū rā duzdīde	34b/23 34b/20
22	世界の王チンギス汗	pādshāh-i jahān ⟨gīr⟩ Chīnkkīz Khān	44b/2 42b/21
23	チンギス汗は命じた	Chīnkkīz Khān farmūd	25b/28 25a/13
24	マルグズ・ブイルク汗	Marghūz Būīrūq Khān	24b/8 24a/1

25	カダン・タイシ	Qadān Tāīshī	38a/25 37b/29
26	ウルート部族	qaum-i Ūrūt	40b/2 39a/23
27	先祖達	ābā‘ va ajdād	37a/4 36b/11
28	彼らの名〔は〕	nām-i īshān	16a/28 17a/2
29	炉床と火種	āteshdānhā va āteshhā	30b/15 30a/16
30	首長位と王位への望み	hūs-i sarvarī va pādsh-āhī	37a/7 36b/13
31	彼の心の中の望み	marād-i del-i ū	25b/25 25a/9
32	その年月はといえば	muvāfiq-i shahūr-i sin-n-i	28a/13 27a/22
33	帽子を木の先に［のせて］	kulāh bar sar-i chūb	28b/7 27b/20
34	左翼の千人隊長	umarā‘-yi hezār-i dast-i chap	36b/23 36b/2
35	彼らを玉座の版図に入れた	īshānrā dar takht-i taṣ-arruf āvarde būd	32b/24 32b/5
36	オンカンの父祖達の王権	pādshāhī-yi pedarān-i Ūnk Khān	27a/19 26a/21
37	上述の人	kas-i madhkūr	31a/15 30b/6
38	彼（チンギス汗）の大后、ボルテ・フジン	khātūn-i buzurg-i ū Bū-rte Ūjīn	40b/27 39b/16
39	アムカジン・バートル	Amkajīn Bahādur	16a/18 16b/22

40	トルイ汗	Tūlūī Khān	35b/29 35b/21
41	サルタク・ノヤン	Sartāq Nūyān	15b/7 16a/15
42	アリーナク・バートル	Alīnāq Bahādur	24b横/1 23 b 左 / 25
43	預言者ノア	Nūḥ Peighambar	28b/12 27b/26
44	アルタン汗の御家人	umarā'-yi buzurg-i Altān Khān	37b/15 37b/1
45	高位の御家人	amīr-i buzurg va mu'tabar	22a/28 22a/21
46	ある日……を見た	rūzī dīd ke……	42a/7 40b/18
47	娘を彼らに与え、〔彼らから娘を〕娶った	dukhtar be īshān dihand va sitānand	36b/22 36b/2

以上の例から明らかなように、これらのいずれの場合も、語句が挿入されることによって文章・文脈が整えられ、より詳しく的確な表現となっていることがわかる。但し、このように増補されている部分は非常に多いが、I写本には見られないひとまとまりの新たな情報がモンゴル語原典史料から付け加えられた例はない。(4)

(2) イスタンブル（I）写本に対してテヘラン（T）写本で語句が言い換えられている例

言い換えられている部分の代表的な例は下記の表の如くである（表4）。

言い換えられている部分は以下の如く分類できる。

①単語・綴字の誤りが訂正されている例（1〜20）

②綴字・表現がT写本で異なり、P・L写本に継承されている例（21～34）

(3) イスタンブル（I）写本に対してテヘラン（T）写本で語句が削除されている例

I写本を基準として見た削除は、さきに述べた一七の記事の大きな削除部分以外は筆写時の誤り等であり、本稿の考察では省略する。

以上、(1)、(2)、(3)で考察した結果をまとめると、I写本を基準としたI写本とT写本との関係は、I写本から大幅な記事の削除を行い、I写本の誤りの多くを訂正し、I写本の簡明直截だが舌足らずの表現を語句の増補・言い換え・削除により、文脈を整え、理解しやすい表現に改めたのがT写本ということになる。逆にT写本を基準とすると、I写本はT写本に新たな記事を大幅に付け加え、T写本の語句に多くの誤った削除・言い換え・増補を施し、簡明直截だが文脈の乱れた、かつ部分的に誤りの多い文章に変えた写本ということになる。T写本をもとにI写本が成立したと見るのは不自然であり、I写本系統の写本からT写本が成立したと考えるのがより自然であろう。このことを裏づけると思われる一例がT写本の「オイラート部族誌」中に見られる。

I写本に見られる「オイラート部族誌」の「ブカテルムの四姉妹の話」の後半部分、「ravāyatī-yi dīgar」（別の話は……）以下に記されている話はT・P・L写本では欠落しており、P・L写本は「ravāyatī-yi dīgar」以下を削除している。ところが、T写本は当該行の最終の語句として「ravāyatī-yi dīgar」の二語を意味なく残して

表4　「イスタンブル（I）写本」に対して「テヘラン（T）写本」で語句が言い換えられている例
（下線部分が「テヘラン（T）写本」の表記）

			引用箇所 上段I写本 下段T写本
1	カン⟶チンギスハン	Qān⟶Chīnkkīz Khān	44a/10 42b/2
2	フラグカン⟶フラグハン	Qān⟶Khān	14b/8 15a/18
3	トルイカン⟶トルイハン	Qān⟶Khān	15a/7 15b/17
4	ノカイ・バウルチ⟶ノカイ・ヤルグチ	Bāūrchī⟶Yārghūchī	37a/15 36b/21
5	70年⟶7年	haftād⟶haft	43b/2 41b/27
6	スブタイ・バートルの甥アジュ⟶孫アジュ	barādarzāde ⟶pesarzāde	32a/11 31b/11
7	容貌と…と称号⟶容貌と…と言語	laqab⟶lughat	16b/25 17a/21
8	スニート種族⟶スニート部族	qism⟶qaum	16a/26 16b/29
9	あの習慣⟶彼の習慣	an⟶ū	33a/16 33a/8
10	彼らの兄はグユクハン⟶長兄	mihtar⟶mihīn	20b/21 20b/10
11	Qūbīlāī Vān	Vān⟶Qān	20b/2 20a/21
12	Sabāh	Sabā	15b/7 16a/15
13	qaum-i Ūrbāt	qaum-i Ūyāt	15a/13 15b/22

14	Īlkāī Yūnān	Īlkāī Nūyān	14b/8 15a/18
15	Qaum-i Yīsūt	Qaum-i Bīsūt	43a/14 41b/13
16	yārsā	yāsā	14b/15 15a/26
17	Yārūlā	Bārūlā	16a/4 16b/10
18	Salankūn	Sānkūn	25a/5 24a/15
19	Unkūz	Ūnkūr	36b/28 36b/7
20	Kūchūr	Kūchūkūr	36b/25 36b/4
21	be vujūd āmad	dar vujūd āmad	15b/9 16a/17
22	Samaqār	Samaghār	19a/15 19a/14
23	Dūlādāī	Ṭūladāī	16a/14 16b/19
24	Tarātai	Tarūātai	17a/7 17a/29
25	Ashak Tughlī	Ashak Ṭūqlī	15b/28 16b/5
26	Takūdār	Nakūdar	15a/20 16a/1
27	Kūrat	Kūrūt	15a/26 16a/6
28	Dūrbāī	Durbāī	18b/16 18b/16

29	Shīrāmūn	Shīramūn	15a/5 15b/14
30	Qāīdū	Qaidū	14a/28 15a/9
31	akhtāchī	aqtāchī	15a/25 16a/5
32	andā qudā	anda qūda	33b/10 33b/8
33	qumā	quma	14b/24 15b/6
34	pesar-i ū	pesarash	19a/2 19a/2

いる。I写本系統の写本からT写本が筆写された時、筆の勢いで行の最終文字まで書き進めてしまい、削除すべき語句が残ってしまったと考えられる。

以上のことからI・T・P・Lという古写本から見る限り、I写本が基本にあり、I写本系統の写本からT・P・L写本が成立したと結論づけられる。

二　イスタンブル（I）写本の重要性

前章において、現在利用し得るI・T・P・L、四つの古写本をもとに考察を重ねた結果、一三一七年筆写のI写本とほぼ同時期の筆写と思われるが、その内容がI写本と大きく異なるT写本があり、T写本がP・L両写本に継承されていることがわかった。つまり、イル汗朝時代に筆写されたI、T二系統の写本があり、I写本系統をもとにT写本系統が成立したと結論づけられた。但し、これはわずか四つの古写本から検証して得られた結論であり、かなりの数が残されている一六、一七世紀

の新しい諸写本を参照し、同様の結論が得られるかどうかを確かめてみる必要がある。もし、これら新しい写本の中に、I写本系統、T写本系統と全く別の系統の写本が存在するならば、前章で得られた結論は、必ずしも十分なものだとは言えないからである。但し、新しい時代の写本になると、筆写を重ねる間に誤りが生じ、細かな点で諸写本に見られる異同が混り合って出てくるので、前章で考証したような語句の相違という小さな部分からだけでは写本の系統を特定し難い。そこで、I、T、P、L、四つの古写本間に見られる非常に特徴的な相違点のみを取り上げて後の時代の写本とを比較するならば、一六世紀以後の『モンゴル史』はいかなる系統の写本が伝っているかを明らかにすることができるであろう。一六世紀以後の写本として利用するのはB_2・B_3・IN写本であり、比べる相違点は以下の六項目である。

①T写本に見られるI写本からの大小一七の削除記事（表5の1～17）、P写本に見られるI写本からの削除記事（「オイラート部族誌」21b／4～7、「マングト部族誌」40a／23～25）（同18～19）

②T写本に見られる「タムガリーク部族誌」という表題（記事はないが、「コルラウト部族誌」と「タルグート部族誌」の間に表題のみが見られる。）（同20）

③「ケレイト部族誌」に見られるケレイト諸氏族の記事（トマウト氏族とトンガイト氏族の記事の内容が入れ替っている。）（同21）

④「ジャライル部族誌」に見られるイルカイ・ノヤンの第八子、九子、十子の名前（P・L両写本ではそれぞれ第九子、十子、八子の名前と記されている。）（同22）

表 5　各写本間に見られる特徴ある記事の有無

			I	B_2	T	IN	P	B_3	L
						集史			集史
①	1	ジャライルの部族伝承に関する話	○	○	×	×	×	×	×
	2	ソルカクタニベキの銀搬出の話	○	×	×	×	×	×	×
	3	シギクトクの話	○	○	×	×	○	○	○
	4	ブカテムルの四姉妹の話	○	○	×	×	×	欠葉	×
	5	ケレイト部族の夏営地・冬営地の話	○	○	×	×	×	×	×
	6	ジルキン氏族の来降についての話	○	○	×	×	×	×	×
	7	オンカンの父と兄弟の話	○	×	×	×	×	×	×
	8	オンカンのチンギス汗からの離反の話	○	○	×	×	×	×	×
	9	チンギス汗以前のナイマン部族のユルトの話	○	○	×	×	×	×	×
	10	「ウイグル部族誌」の結語部分	○	○	×	×	○	○	×
	11	オンギラート部族のユルトの話	○	○	×	×	×	×	×
	12	バヤウト部族のユルトの話	○	○	×	×	×	×	×
	13	ナチンに関する異説	○	○	×	×	↔○	↔○	↔○
	14	ジェベ来降についての話	○	○	×	×	×	×	×
	15	タイチウト部族の内部事情	○	○	×	×	×	×	×
	16	古来親縁関係にあった諸部族に関する話	○	○	×	×	×	×	×
	17	イルチダイの話	○	○	×	×	○	○	○
	18	オイラート部族のユルトの話	○	○	↔○	↔○	×	欠葉	×
	19	クドスン・ノヤンの話	○	○	○	○	×	×	×
②	20	「タムガリーク部族誌」という表題	×	×	○	○	△	欠葉	×
③	21	ケレイト諸氏族の記事	○	○	×	×	×	×	×
④	22	イルカイ・ノヤンの第八、九、十子の名前	○	×	○	○	×	×	×
⑤	23	Dār al-Islām（平安の都）	×	×	×	×	○	○	×
⑥	24	「ウリャンカン部族誌」中に見られる錯簡	○	△	○	○	▲	▲	×

①○；記事がある場合（↔○；記事の一部に前後した部分がある場合）、×；記事がない場合
②○；表題がある場合、△；表題の一部がある場合、×；表題がない場合
③○；I 写本と同じ場合、×；I 写本と異なる場合
④○；I 写本と同じ場合、×；I 写本と異なる場合
⑤○；形容語句がある場合、×；形容語句がない場合
⑥○；錯簡がある場合、△、▲；錯簡と訂正が混在する場合、×；錯簡がない場合

⑤「ジャライル部族誌」中、P写本に見られるタブリーズを形容する「平安の都」(Dār al-Islām) という語句 (同23)

⑥「ウリャンカン部族誌」中、I・T両写本に見られる記事の錯簡 (P写本では錯簡は正されているが、誤った部分もそのまま残されている。L写本では正された形のみが記されている。) (同24)

以上の六項目について、I・T・P・L・B_2・B_3・IN写本を用いてI写本を基準とする異同を整理すると前頁の表が得られる (表5)。

この表から直ちに理解できるようにB_2写本は紛れもなくI写本系統の写本、IN写本はT写本系統の写本、B_3写本はP写本系統の写本、L写本は章立てが異なっていることを除けばP・B_3写本と同一系統の写本である。(1)〜(19)の記事の有無はI、T、P写本がほぼそれぞれ、B_2、IN、B_3写本に踏襲されている。(13)、(18)の記事の一部、P、T写本に前後した部分があるが、それもそのまま踏襲されている。(20)〜(24)についても、それぞれの古写本の記述及び錯簡がそのまま踏襲されている。『モンゴル史』の後代の写本として見られるのは、B_2・B_3・IN写本以外のものを含めてみても、結局のところ、I写本、T写本、P写本及び章立てが異なったL写本の四系統に限られる。既に述べたように、T・P・L写本は大きな意味で一つの系統の写本であり、結局、『モンゴル史』の写本は前章で考証したように、I写本系統、T写本系統の二系統にはっきり分かれる。つまり、前章で行った考証の結論は見るべき写本の系統を総て尽してなされた正しいものといえよう。

ここでIN・L両写本の『モンゴル史』が『集史』「モンゴル史」の写本であるという事実に注目したい。IN写本

が『集史』の写本であることから「部族誌」の記事がIN写本の「部族誌」と全く同系統のものであるT写本も『集史』「モンゴル史」の写本といえる。また、P写本の「部族誌」の記事は単語の言い換えはあるもののT写本の「部族誌」の記事と同系統のものであるので、[5] P写本も『集史』「モンゴル史」系統の写本ということになる。P写本の「部族誌」の章立てを替えたのがL写本の「部族誌」であり、そのL写本は『集史』の写本である。この点からも、P写本は『集史』「モンゴル史」系統の写本であることが確認される。現存するT・P両写本はそれぞれ「モンゴル史」の一部及び「モンゴル史」を伝える写本で、「万国史」を伴った『集史』という形でこそ残されてはいないが、『集史』「モンゴル史」系統の写本なのである。特にT写本は既に述べたようにモンゴル人名、モンゴル語・トルコ語起源の術語の正確さ、記述の正確さから見て、イル汗国の国家事業として作成された写本そのもの、あるいはその写本から間もない時期に筆写された写本と考えられる。言い換えれば、T写本は一三一一年、オルジェイト汗の命令で完成された『集史』「モンゴル史」そのもの、あるいは『集史』「モンゴル史」初版完成からあまり隔てない時期に忠実に筆写された写本と結論づけられる。

それでは『集史』「モンゴル史」の初版、あるいはその姿をそのまま伝えていると思われるT写本のもととなったと見られるI写本とは何か。『集史』「モンゴル史」に先行し、そのもととなり得る著作といえば、ラシードがガザン汗の厳命を承けて著した原初の『モンゴル史』系統の写本以外には全く該当するものは存在しない。I写本は原初の『モンゴル史』系統の写本なのである。従来、原初の『モンゴル史』と『集史』「モンゴル史」は何ら検証されることもなく、当然の如く、同一内容の著作と看做され続けてきたが、実は、『集史』「モンゴル

史」は原初の『モンゴル史』を改編したものであり、両書の記事の内容はかなり異なるものなのである。両書の差異はそれぞれの序文の体裁・内容に関しても明瞭に表われている。

I・T・P・Lの四写本には、いずれも巻頭に『集史』の序文が付されているが、この中に、原初の『モンゴル史』の序文「ガザン〔汗勅撰モンゴル〕史（Tārīkh-i Ghāzānī）と名づけられる本書編纂の次第」も挿入されている。『集史』「モンゴル史」の写本であるT・P・L写本ではこの部分が『集史』序文中の一続きの文章として組み込まれているのに対し、I写本では『集史』の序文は載せるものの、原初の『モンゴル史』の序文は独立したものとして、章立ても別にして伝えている。(6) I写本に見られる原初の『モンゴル史』の序文中には、国家存亡の危機に即位したガザン汗がモンゴルの歴史書編纂事業を通じて麾下のモンゴル諸部族、諸部将を己の政権下に強固に結びつけようとした執念が伝えられている。『モンゴル史』は政権確立をはかるガザン汗の強い政治的要求に沿って編纂されたものであり、編纂事業の過程そのものにも大きな意義があった。一方、『モンゴル史』編纂の勅令が下ってから約十年を経た『集史』編纂時のオルジェイト汗の時代は、国家存亡の危機を乗り切ったガザン汗時代を承けて国内の状況はイル汗国史上でも最も安定しており、モンゴル帝国全体を見てもユーラシア大陸東西の各王家間の友交関係・一体性が確立された「パックス・タタリカ」と言われる繁栄の時代にあった。「モンゴル史」「万国史」を合わせた『集史』が編纂されるに十分な背景と機運が漲っていた。『集史』序文中には、編纂に際してのラシード・ウッディーンの姿勢が語られているが、『モンゴル史』序文の如き切迫感はない。不安定な政権下、これを克服すべくガザン汗の現実的要求に沿って編纂された『モンゴル史』とオルジェイト汗

時代の安定政権下、『集史』の一部として改編された『集史』「モンゴル史」ははっきりと区別されるべき著作なのである。

むすび

一三〇一／二年、ガザン汗の厳命を承け、勅命を奉じたラシードはガザン汗政権確立期の激務の中、モンゴル語原典史料を主要な典拠とし、賢人達・学者達（dānān va ḥukamā'）、モンゴル部将達からの取材などにより急遽『モンゴル史』を作成した。極めて短期間に編纂された『モンゴル史』の初版写本は現在は残されていないが、恐らく、文章には多くの混乱した箇所があったものと思われる。それというのは、その後成立したかなり整ったように見えるT写本にしても人名の統一、部族名の統一、記事の整理は未だ不十分であるからである。一三一七年、バグダードで筆写されたI写本には、モンゴル人名、術語の誤りも多く、文章の乱れも多々ある。これらはバグダードにおける写字生のモンゴル語に対する理解不足ばかりではなく、原初の『モンゴル史』初版本そのものにまだまだ多くの乱れが残されていたことにもよると考えられる。しかし、ガザン汗の切実な政治的要請にラシードが簡明直截な表現で応えた原初の『モンゴル史』の記事にはガザン汗の執念が乗り移ったかのような迫力があり、核心部分を端的に伝えている点に関しては、改編された『集史』「モンゴル史」の記述を凌ぐ。既に述べてきたように、原初の『モンゴル史』は、モンゴル語原典史料に拠って書かれたモンゴル諸部族・モンゴル諸部将に関するより多くの記事を含んでおり、史料的価値から見ても『集史』「モンゴル史」に優る。以上の点か

ら、モンゴル帝国史研究に際しては『モンゴル史』こそを主軸に据えるべきである。尚、現在残されている写本は、ほとんどが『集史』「モンゴル史」系統の写本である中、I写本は原初の『モンゴル史』全体の姿を伝える唯一の古写本として極めて貴重であり、モンゴル帝国史研究にあたっては底本とすべき写本といえる。

『モンゴル史』系統の古写本であるI写本には、「本紀」第一章の世系表の後に系図が付されている。B_4写本は「序文」、「部族誌」から「ジョチ紀」第一章までを欠いた原初の『モンゴル史』系統の古写本だが、やはり、「本紀」第一章の後に系図が伝えられている。これに対して、『集史』「モンゴル史」系統の古写本であるT・P・L写本には系図は付されていない。しかし、『集史』附篇『系譜集』(Shu'ab) 中には、原初の『モンゴル史』「部族誌」、「本紀」、「世系表」、「后妃表」中の記事、系図に更に新たな知見を加えて編纂された「モンゴル系譜」が添えられており、削除された『モンゴル史』の系図が補強された形となっている。「モンゴル系譜」は『モンゴル史』と共に参照し、利用すべき重要な史料である。(7)

尚、本稿においては「部族誌」に限定して論を進めてきたが、「チンギス汗祖先紀」、「チンギス紀」、チンギス汗の後裔達の諸「本紀」を見ても基本的には同様の結論が導き出されるはずである。(8)

註

（1）志茂碩敏『モンゴル帝国史研究序説』東京大学出版会、一九九五年、序章（二一九頁）参照

（2）I写本を基準として、T、P、L写本がそれぞれ別の異なり方をしている場合も理論上はあり得るが、このような例はほとんど見つけられないようなので割愛する。

（3）こうした例として以下のものが挙げられる（上がI写本、下がP写本とする）。

誤記されている例

Abāqā Khān → Chīnkīkiz Khān (34a/13, 57b/2); Hūlāgū Khān → Qūbīlāī Qān (41a/16, 80b/30); Ūgtāī → Ūrqana Khātūn (21b/19, 76b/19); Sūbātāī → Sūbktāī (15a/19, 150b/32); Būrke → būd ke (15a/19, 150b/32); Jūrme → Jūn me (19a/11, 27a/12); Tūqū → Qūtū (14b/12, 14, 150a/31, 33); Qarāīsūdar → Qarāmūdar (16a/11, 151b/15); Ītqūn → Batqūn (14b/12, 150a/30); qūshchiyān → qūrchiyān (40b/28, 80b/13); Fūjīn → Fūrjīn (16a/22, 151b/26); tamā → tamām (15b/21, 151a/29); nesyān → bisyār (30a/25, 52b/18); andak → ānk (16b/12, 25a/4); bā → mā (17b/4, 25b/20)

訂正されている例

Tūlak → Tūkal (34b/15, 57b/33); Ūchaghān → Chaghān (28a/26, 74b/9)

同義あるいは近い意味の語で言い換えられている例

sarvar → muqaddam va sarvar (20b/18, 28b/1); naẓar → nigāh (19b/12, 27b/9); dar pei → bar ʻaqab (19b/2, 27a/33); nafar → nūkar (42b/1, 81b/31); yekī → kasī (14a/19, 150a/9); ḥukūmat → ḥākim (21b/19, 76b/20); ḥishmat → ḥurmat (16b/16, 25a/8); qaum → nasl (31a/3, 54a/3); gunāh → gunāhkār (43b/29, 13a/12); khwīshāvandān → khwīshān (28b/14, 74b/29); Ūīghūr → Uīghūristān (26b/5, 78b/9); vei → ū (33a/12, 56a/31); namānd → dar guzasht (29a/16, 51a/31); buzurgīn → buzurgtarīn (33a/14, 56b/3); ʻaẓīm → beghāyat (36a/1, 59a/1); aknūn → īn zamān (35a/26, 58b/2); che → keh (43b/4, 82b/23)

綴字を換えて筆写されている例

Mūkā Khātūn → Mūka Khātūn (29a/29, 51b/11); Būghūrchīn → Būrghūchīn (34a/23, 26, 57b/13, 16)

単複を換えて筆写されている例

īshān → ū (36b/11, 59b/4) ; Mughūlān → Mughūl (26b/6, 78b/10)

動詞を換えて筆写されている例

khāmūsh māndе → khāmūsh gashte (34a/8, 57a/31) ; mu'tabar dāshte → mu'tabar shude (35a/2, 58a/13) ; nazdīk āmade → nazdīk ast (28a/20, 74b/3) ; muqarrar māndе → muqarrar shude (32b/4, 55b/11) ; mashghūl būde → mashghūl shude (36b/26, 59b/10) ; khud rā Mughūl gūyand → khud rā Mughūl dānand(16b/28, 25a/20) ; dar gunāh āvarde → dar gunāhkār gardānīde (43b/29, 13a/12)

倒置されている例

Mughūl va Kerāīt → Kerāīt va Mughūl (32b/24, 56a/5) ; qalān va ūlāgh → ūlāgh va qalān (28a/28, 74b/12) ; gāv va asb → asb va gāv (30b/10, 53a/4) ; bisyār guft → guft va gūi-yi bisyār (34b/29, 58a/11)

その他の例

be → dar (42b/24, 82a/22) ; tā → dar (35b/17, 58b/21) ; be → pīsh (19a/23, 27a/26) ; dar → az (30a/20, 52b/14) ; ū → an (37a/5, 59b/16) ; an → īn (33b/18, 57a/9) ; Khudāī bā man sukhan mī-gūyand → Khudāī īn sukhan mī-gūyand (33b/27, 57a/19)

(4) I写本にない記事がT写本に見られる例もあるが、これらのほとんどは、I写本が原写本から筆写される際に写字生が書き飛ばしてしまった部分である。行を隔てた同一語句、あるいは類字語句の間が脱落しているのでI写本筆写時の筆写ミスと確認できる。

(5) T写本に「タムガリーク部族誌」という表題が記されている部分、P写本には「　部族誌」と表題の一部が記され、すぐにミニアチュールが続いている。この事実はP写本がT写本と同系統の写本であり、P写本がT写本系統の写本をもとに作成された一つの証拠となるであろう。

(6) I：7a

(7) 『系譜集』と『集史』の関係については赤坂恒明「『五族譜』と『集史』編纂」（『史観』第百三十冊、一九九四年、四七―六一頁）がある。但し、『モンゴル史』と『集史』「モンゴル史」の関係については触れられていない。

(8) T写本とI写本の筆写年代の関係については触れなかったが、T写本の筆写時期は一三一一～一三一七年の間で、T写本の方が古い可能性はある。また、P写本はイル汗国時代末期に筆写されたものと筆者は考えているが、これらの問題についてのより具体的な考察は他日発表するつもりである。

尚、I写本とT写本との関係は本稿で考証してきたとおりであり、白岩一彦氏のT写本系統をもとにI写本が成立したとする説（『オリエント』三六―一、一九九三年、五〇―七〇頁）には賛成できない。

本稿は第三七回常設国際アルタイ学会（一九九四年六月、パリ郊外シャンティイ）で行った発表に加筆したものである。発表に際しては、岡田英弘先生、宮脇淳子氏に貴重な助言を頂くと共に、大変お世話になった。岡田先生には本稿執筆にあたっても色々とご指導を頂いた。本稿掲載に際しては護雅夫先生からもご推薦を頂いた。小松久男氏には有益な助言を頂き、杉山正明氏、松本明氏からは数々の励ましを受けた。以上の諸氏に感謝を捧げると共に、厚く御礼申し上げるものである。